

食卓囲み、くつろいで

最寄りの東武スカイツリーライン、新越谷駅から歩いて十数分、埼玉県越谷市登戸町の住宅街の一軒家のドアの脇に「憩いの家水いっばい」と書かれた看板がかかる。カトリック越谷伝道所が2011年から毎週水、木の両日に開く、誰でも立ち寄れるフリースペース。呼び鈴を鳴らすとマルコ・ヴィツラ神父（マルコ）がエプロン姿で出迎えた。マルコ神父は北イタリア出身で海外宣教を志し、00年に来日。福岡教区の佐賀教会主任司祭、さいたま教区の佐野教会協力司祭などを経て、教会がない越谷市に伝道所を開いた。1年がかりで越谷のニーズを調べ、「カトリック系の場所がないなら、礼拝よりもまずは人に会って一緒にご飯を食べながら話したい」と考え、フリースペースを設けた。「疲れた時、のどをうるおすことのできる、一杯の水のような存在になりたい」との思いを看板に込めた。

朝10時から午後4時まで6畳の和室と台所を開放する。定員7人だが、10数人が集まる日も。取材に訪れた時は昼下がり、30代から70代までの男女4人が神父と談笑していた。参加者に好評なのは昼食。神父が腕をふるい、スープとパスタを料理する。この日は差し入れの伊豆大島土産のアシタバとバジルソースの pasta、季節にあわせて冷たいジュースやポロネギ風味のジャガイモのポタージュ、ヴィンソーのポタージュを振る舞った。ポランティ

アも一品料理を提供し、皆で食卓を囲む。越谷市民、口コミや友達に連れられてきたキリスト者、傾聴ボランティア関係者ら、集まる人々もさまざま。地域の情報交換やゲームを楽しむなど、過ごし方は多様だが、どんな人でも受け入れられるため、宗教の話はしない。悩みを抱える人には別室で神父が個別に話を聞く。今年4月6日の3カ月で、のべ約120人が訪れた。「誰が来ても初めてでも自然に受け入れてくれる」神父の細やかな気遣いも人が集まる理由だ。月に1度のヨガ教室や市内散歩の企画も始まった。夜勤明けで1カ月ぶりの来訪というゲーム会社勤務の30代の男性は「会社に勤めていても、人と面と向かって話をしたりする場所が意外とない」と言い、
「ありがたいこの場をかげがえないものと感じている。」
(山縣淳)